

田中村太郎博士著「コルネーク」
「高等統計官時代」
西伯利
政府

N-0049

0421

特輯 昭和十五年三月

田中耕太郎中將遺稿

「コルチャーク」高等統治官時代ノ西伯利亞政府

秘

第 24 號

外務省調査部第四課

E	5	2
8	5	3
T 207		
240575		

E	5
T 207	

12.2.1.0-1

554

N-0049

0422

故田中耕太郎海軍中將略歴

明治元年三月丹波篠山ニ生ル○同二十三年四月海軍兵學校ヲ卒業少
尉候補生ニ任シ爾後累進要職ヲ經テ中將ニ進ミ大正十二年退官ス○
其ノ間同三十三年露國留學被仰付、爾來海軍軍令部第三局局長、電
令部參謀、大本營參謀、東京軍法會議判士、同判士長、同四十二年
二月在露國大使館附武官、大正三年馬港要港參謀長、海軍大學校教
官等ニ歷補シ同四年露國皇太子ミハイロヴィツテ殿下來朝ニ付接伴
委員被仰付、同五年十一月軍令部第三班課長、同月露國出張、同七
年十二月軍事視察ノ爲露國ニ赴クニ夫々出張被仰付、同八年一月
滿洲派遣軍司令部附、同十一年六月海軍將官會議議員ニ補シ同年十
一月本職ヲ免シ、同十二年三月豫備役、昭和三年三月後備役、同八
年三月退役被仰付○同十四年十一月九日卒去

一 緒 言

一九一八年(大正七年)十一月十八日海軍大將(筆者曰クニコライ
二世ノ裁可ヲ經タ官階ハ中將ナルガ、茲ニ稱スル海軍大將ハ高等統
治官ニ就任セルトキ下ヨリ奉ツタ官階ト覺ユ)アレクサンドル・コ
ルヂヤイフクヲ首腦トスルソムスタフ政府ガ成立シ、次デ翌一九一九年
十月末同政府ノソムスタフ市敗退ノ止ムナキニ到ル迄約壹ケ年ノ經過
ハ、ソ聯邦露國ノ歴史ヲ通ジ實ニ劃期的ノ時代デアッタ。何故カト
云フト、同政府ハ初ノ間ハ多數ノ反露リシエウキキ陣營ノ中ニアツ
テ最モ内外ヨリ望ヲ囁セラレタニ拘ハラズ一朝ニシテ崩壊シ、スラ
ヴ民族ニハ不似合ノ共產主義者デアルツコトレタリ、ト專制ヲ政綱ト
スル露リシエウキキキノ全露統一ヲ招來セシメタルト、一面ニ於テ又
ソムスタフ政府ヲ援助セル外國ノ介入ガ如何ニ恐ルベキデアルカヲ現
代露國ノ支配階級ニ覺ラシメタルト觀ラルルカラデアル。

セル今日、筆者ノ知ル限リ相當豐富ナモノデアアル。今其著シキモノヲ舉グレバ蘇聯政府ノ官版ニ

1. 10 лет Вечных Полюсов С. С. С. Р., 1927г.
2. Сибирь, Сомонские и Колчан. Г. Гинс.
3. Трагедия Амурского Колчана. С. Петрович.

等ガアル。此外外國人ノ著書モ相當ニアリ又當時ヲムスツテ滞在ノ英、佛特務機關ノ勤務員ガ感想録ヲ各自國ノ雜誌ニ發表セルモノモ頗ル多イ。併シ此等ハ各自國政策ノ辨護ニ努ムルト、著者自身ノ自家陶酔ガホノメカサレテ、公平ナ觀察トハ評セラレナイ。何ヘバ佛國特務機關長ジャナ(Janis)陸軍少將ガ一九一九年十一月十二日ノ日記トシテ佛誌ル・サン・ド・ヌーヴ(一九二四年一月二日號)ニ

「セルヤ」トニ政權ヲ獲サセタ英國ノ深謀遠慮ハ驚カニカノニシヨ

「イ」ニ世ノ没落ヲ促シタ場合ノソレニ殆ト劣ルモノデナカッタ。

若シ英國ニシテコルチヤークヲ擁立セザリシナランニハ余(ジャナ)ハ全露ノボリシエツキーズムヲ擊滅シ得タト迄ハ斷言ヲ憚ルモ、セメテハ西伯利亞ヲ救助シ秩序ヲ維持シ得タト確信ス。

ト發表セルニ對シ同時ヲムスツ市英國特務機關長タリシノツクス(Zaok)陸軍少將ハ、直チニ英誌ヌーヴオニツク。レヴニ誌(一九二五年三月號)ヲ籍リ辯駁シテ

「セルヤ」トクノク。セルヤハジャナ將軍ノ西伯利亞到着前ノ事ニ屬シ又英國ニ通知サレズ隨ツテ英國ノ默認ナドアルベキ筈ハナイ。

元來ジャナ將軍ヲ西伯利亞ヘ派遣セル目的ハ、西伯利亞ニ駐屯セル總勢力、即、露西亞軍ヲ初メ聯合國軍ヲ并進センメル筈ナリシモ當初ヨリ斯ル事ノ行ハレ得ベキニアラズトハ自然一般ノ認ムル所デアツタ。果シテ露軍ハ自國ノ領内ニ於テ自國ノ義舉ニ奮闘セントスルニ當リ、外國將校ノ指揮ヲ受クルノ謂レナシト主張シ此ル誤議ヲ峻拒シタ。此專著シク同將軍ノ自負心ヲ損シタト觀ラ

ニコライ二世ノ没落ヲ招來セルハ其責英國ニアリト云フ如キ、全
然事實ヲ歪曲セル獨逸製ノ宣傳デアツタ事ハ將軍モ夙ニ知悉ノ等
西伯利亞ニ於テ最後ノ悲劇ヲ來シタ原因ハ澤山アル。中ニ就キ記
スベキ價值アリナガラ同日記者(本文筆者曰クヂヤン)ニヨ
リ故ラニ省略サレタト認メラルル件ハ佛國指揮官ガ自己ノ部下ニ
ル聯合軍ノ軍紀ニ正當ニ維持スル能ハザリシ失敗ニ因ル。
上ハ且ニコルチヤトクヲ繞ツテ英、佛感情ノ動搖ヲ示シタニ過
ギヌ。此外ニコルチヤトクノ本營タル露軍トエツコ軍トノ間ニ懸
ル相互ノ惡感情、隨ツテ多エツコ軍ヲ統督スルヂヤン將軍ト露
軍間ノ惡感情ガ時ニ發露スルト、米國軍軌道外レノ行動等ガ加ハ
ツテ、ニコルチヤトクノ西伯利亞政府ノ歴史ハ正ニ聯合國側ノ一部
間關史タルノ觀ガアル。サレバ西伯利亞政府ノ歴史ヲ讀ム者ハ著
者ノ國籍ニヨリ欺カレザル様注意スルヲ要ス。

S. 12.2.1.0-1 561

5
ニコルチヤトクト本文筆者トノ個人關係
時ハ正ニ歐洲大戰ノ酣戰期ニアツタ。一九一六年九月十六日午前十
時ノ刻、ニコルチヤトクノ軍艦奧深ク碇泊中ノ黒海艦隊ノ最新鋭戰
艦イムペラトリツア。ワリア(二五、〇〇噸)ノ前部六吋砲
火藥庫ニ突如トシテ爆發ガ起リ其カラ次第ニ後部火藥庫ニ及ボシ、
同艦ハ遂ニ五分ト運タヌ中ニ眞倒サマニ傾覆沈没セル椿ヲ見タノ
デアツタ。此迄露國海軍ノ火藥ハ安定性ヲ有ツモノトシテ内外ニ定
評アリ、歐米諸國海軍ニハ火藥庫自爆ノ厄ニ遭ヘル軍艦ノ先例往々
見ル所ナリシモ獨リ露國海軍ニハ此例絶無デアツタ。
ソコデ此ハテツキリ獨深ノ使談ニ基クモノトシテ露國海軍當局ハ恐
惶ヲ感ジ深ク警戒ヲ加フル事トナツタ。伊太利海軍ニアツテモ一マ
リアー卜前後シテ八月二十三日夕ラント灣碇泊中ノ戰艦レオナルド
ジ。ウキンツ(二五、〇〇噸)ニ火藥庫爆發起リワリアト同一狀
態ヲ沈没シタ。此ヲ思ヒ自ラヲ省ミルトキハ獨深ノ疑ハ露國海軍當
6 12.2.1.0-1 562

局ニ益々深刻トナル譯テアル。サルニテモイクラ軍務多端ノ際トハ
 言ヘ、沈没艦ヲ其儘ニ放置スル譯ニ行カヌ。第一、場所ガ大船渠
 ノ入口ニアル事トテ艦船ノ入渠ヲ不可能ナラシム。第二、歌洲大戦
 ノ終熄ヲ待ツテ徐々ニ引揚方ヲ籌センナドトハ露海軍ノ威威ニ關ハ
 ル。如何ニシテモ艦隊解散スルカ或ハ直チニ引揚方法ヲ講スルカノ
 他ニ途ナキ事トナツタ。サテコソ時ノ露海艦隊司令長官兼海軍
 大臣ニシテ守府司令長官海軍中將ヨシヤキニ上申ニヨリ沈没艦
 艦「マリア」ノ引揚設計ヲ外交手續ヲ履ミ露海軍ニ依頼スルコト
 トナツタノデアアル。

露海軍ハ露艦隊ヨリノ右ノ請求ヲ容レ時ヲ遷サス、造船、造船
 技術官、技手、潜水工ヨリ成ル引揚設計委員及委員附ヲ編成シ現地
 ヘ出張セシメル事トシタ。本文筆者（當時海軍大佐）ハ委員長トシ
 テ一行ニ加ハツタ。斯クテ一行ハ命ヲ承ケテ以來一週間ニ準備ヲ整
 ヘ大正五年十一月二十九日東京出發、西伯利亞鐵道ニヨリ同月十二

月十五日ロヂアストルニ着キ港ニ着イタ。翌十六日設計委員ノ高等
 武官一行ハ我等ノ爲メ豫メ任命サレタル接待官ニ伴フレ旗艦ニヨリ
 ヲヤキ長官ヲ訪問シ着任ノ挨拶ヲ述べ次デ當面ノ用務ニ付キ懇談
 スルトコロアツタ。此ガ本文筆者ガヨシヤキニシテ露海軍ヲ識ツタ初テ
 ノ機會デアアル。

此時ノ初對面ニ於テ彼ニ就キ得タ印象ハ、流石ニ異數ノ拔擢進級ヲ
 得タ將官ダケアツテ潑刺タル英氣眉宇ノ間ニ現ハレ言語明晰、用談
 ノ應對裁決流ルルガ如ク、ソレデキテ頗ル優雅ナ態度ノ認メラルル
 モノアリト云フニ歸ス。當面ノ用談ヲ終ツタ後、談偶々日露戦争ノ
 懷舊談ニ及ヒ、彼曰ク「露日戦争デハ諸君ト敵對デ闘ツタ。自分ハ
 敵ニ取ルニハ強敵ヲ撰ブ、強敵ヲ敬スル」トテ日本ハ強敵デアツタ
 トノ意ヲ示セシカバ、本文筆者ハ「現在御同様ガ向フニ廻ハシテ闘
 ツテキル獨逸モ中々ノ強敵デハ御座ラヌカ」ト反問シタルニ彼答ヘ
 テ「否々決シテサウデハナイ、露日戦争デハ我國モ貴國ト毎時モ正



正ノ旗、堂々ノ陣ヲ戰ツタ。然ルニ獨逸ノ行動ニハ陰險卑劣ノ策ガ
多イト。此間答テ本文筆者ハ戰艦マリアノ沈没原因ヲ獨探ノ行爲
ト認ムルモノト直覺シタ。

8 12.2.1.0-1 565

我等設計委員一同ハ、日夜業務ニ精勵シ、大体翌一九一七年（大正
六年）二月末迄ニ設計案ヲ完成スル豫定ヲ以テ歩武ヲ進メタルガ、
幸ニ豫定ヨリモ一週尙前ニ完成シヨルチヤ、少長官ニ提出シタ。
彼大ニ喜ビ我等ヲ謝ス所アリ、即日同案ヲ海軍省ニ提出シ、其ヨリ
陸軍ノ海軍省ニ於テ我委員共同審査ノ上、我引揚案ヲ採用スル事
ニ決シ、海軍大臣ヅリヨシ、ウキツテヨリ我等ノ前ニ宣言シタ。此
ニテ我等委員ノ一行ハ任務ヲ果シ、四月三日東京ニ歸着シタ事デア
ツタ。

我等一行ノ電報アスト、即チ軍港滞在ノ約三ヶ月間ヨルチヤ、少長
官ノ一行ニ詢スル待遇ハ詢レリ盡セリデアツタ。本文筆者ハ設計案
ノ事ニ付キ、彼ノ幕僚ト交渉スルハ尙明カザルヲ知ルガ故ニ、何
時モ長官へ直接交渉ヲ重ネル事ニシテキタガ、何時モ好意ヲ以テ之
ニ應ジ絶ヘテ不快ノ感ヲ懷イタコトハナカツタ。其他旗艦ノ晚宴ニ
ハ必ス招カレ、時ニハ私邸ノ午宴ニ招カレ家族ヲ紹介スルガ如キコ

9 12.2.1.0-1 566

トアリ、或時ニハ自動車ヲ提供シテタリミテノ遊覽地ニ光ヲ御メ、
 一行ノ勞ヲ慰ムルコトモアツタ。此等ノ優待ハ固ヨリ彼ガ我ニ依
 スル所アルカラ然ルモノト觀ルベク、謂ハバ賓客扱ヒサレタ譯デア
 ル。

コルヂヤ、シツ長官ト別レテ後ハ、彼ノ消息ニ就キ知ル所ナカツタ。
 唯露國新聞ニヨリ一九一七年三月革命以來黑海沿岸ノ軍紀ガ極度ニ
 嚴厲シ、下級者ノ上自ヘノ暴行加害ガ屢行ハレツツアルノ報ヲ知ツ
 タ。中ニ就キ暴徒ガコルヂヤ、シツ長官ニ逼リ恩賜ノ佩劍ヲ奪ハント
 セルニ富リ彼ハ憤然色ヲ作シ「露日戦争ニ於テ當時ノ敵日本軍スラ
 我ニ佩劍ヲ許シタルニ、今汝等ニ之ヲ交附シ得ルカ」ト罵リ、直ニ
 劍ヲ脱シテ之ヲ海中ニ投シタト云フ逸話ヲ知ツタニ過ギナカツタ。
 ソコデ本文筆者ハ彼或ハ外國ニ亡命セルカト想像シテ居タ。

然ルニ大正六年（一九一七年）十一月本文筆者ハ圖ラズモコルヂヤ
 』多提督カ米國ヨリ西航ノ途次東京ニ立寄り鐵道沿テルニ宿泊中ト

ノ都下新聞記事ヲ讀ミ、此ハ耳寄りノ話デアルト早速提督ヲ訪問シ
 タ。彼ハ喜悅ノ態ニテ本文筆者ヲ迎ヘ別後ノ久満ヲ叙ベタ。一ハ帝
 政露國海軍ノ重鎮トシテ内ニ至大ノ信任ヲ博シ、外ニハ聯合國海軍
 ノ尊敬、嚮望深カリシ人ガ一朝外國亡命ノ客トナリ、他ハ聯合國
 タル露國海軍ノ爲、苦心努力ヲ重ネタル戦艦ヲ引揚設計案ガ徒
 勞ニ歸シタカバ儼フトキ。彼我共ニ感慨無量タラザルヲ得ナイ。其
 ヲリ彼ハ語ヲ繼ギ「自分ハ苟モ反獨逸戰ヲ讀ケントナラバ露國民ト
 外國民トノ區別ナク一兵卒トシテ奮闘スル堅キ覺悟ニアル。今ハ真
 目的ノ爲メニ「ダソボロシ」ニ行カントスル途上ニアリ」ト語ッ
 タ。其翌日彼ハ海軍省ニ本文筆者ヲ答訪シ本文筆者ノ紹介ニヨリ海
 軍次官（枋内海軍中將）ニ面會ヲ求メ、幾キニ戦艦ヲ引揚設計案ニ際
 シ時ヲ遷サズ引揚設計委員ヲ派遣サレタル機宜ノ處置ニ詢シ謝辭ヲ
 述ブル事デアツタ。本文筆者ハ彼ノ旅情ヲ慰メン爲一夕日本料理ノ
 夕食ニ招キタルモ流石ニ亡命客ヲ自覺スルモノカ始終談々トシテ歡

與ラ蓋サザリシヲ記憶スル。概シテ彼ノ東京滞在中ハ謹慎遠慮ノ態度ニアツタト想像サレタ。彼ノ性格ニ鑑ミ左モアルベキデアラウ。此ガ本文筆者トコルチャイフ提督トノ第二向ノ邂逅デアツタ。彼ト別レテ以來ハ、彼ガボツボツボミア方面ニ向ツタモノト信ジテ居タカ、大正七年（一九一八年）秋彼ガ西伯利亞ノヲムスタ市ニ現ハレ、當時同市ニ成立セル五頭執政政府（デイレクトリー）ノ關員ニ列シ、次デ同年十一月十八日ノ夕。デタトニヨリ推サレテ高等統治官（ウキソトキ）、「ブラウキトテリ」ノ名ノ下ニヲムスタ政府ノ首腦ニ就任セル情報ガ傳ツタ。此頃即一九一八年秋ノ時代ニアツテハ、ブレスト。リトフスカ露・獨單獨購和（一九一八年三月三日）成立セルモ獨逸軍ガ尙未ダウクライナ地方ヲ占據セルト獨・埃軍ノ陣營モ崩壞セズ又ウオルガ河ヨリ全西伯利亞ニ分駐セルヂエツコ、スロワツク兵及其他ノ俘虜ヲ西部戰線ニ回送スルノ必要等ガ認めラレテ、コルチャイフノヲムスタ政府ハ聯合軍殊ニ英佛側ノ注意ヲ惹

キ同情ヲ以テ迎ヘラレタ。ソコデ英佛ハ夙ニ陸軍特務機關ヲヲムスタ市ニ設ケ次デ外交代表者ヲ駐在セシメタ。（英ハサー。チャールス。エリオット即チ後ノ東京駐在大使、佛ハマルテル伯爵後ノ東京駐在大使）。帝國陸軍モ浦潮派遣軍ヨリ武官一行ヲ派遣サレテ居タ。次デコルチャイフノヲムスタ政府ガ地盤ヲ固メ反ボリシエウキ軍トシテ内外ノ聲望ヲ得ルニ及ビ帝國海軍モ亦爰ニ諜報員ヲ派出スル必要ヲ認め、大正七年十二月下旬本文筆者（海軍少將）ニ此使命ヲ命セラレタノデアツタ。

大正八年一月早々浦潮ニ着クト、軍令部長ヨリ「其地ニ滞在後命ヲ待ツベシ」ト電訓ニ接シ、二日許リ後レテ「浦潮派遣軍司令部附ヲ命セラル」トノ電報辭令ニ接シ此ヨリ陸軍ノ勤務ニ服スル事トナツタ。筆者ハ此辭令ニ接シ自己ノ地位ガ向上シタモノト考ヘタ。何故カト云フト、單ナル諜報將校トシテ赴クヨリモ公式交渉ニ當ルノ實務ニ服スル事トナツタト思フタカラデアアル。カクテ浦潮派遣軍司令



部ト事務打合竝ニ沿海州事情研究ノ爲、一月中ヲ浦潮ニ滞在シタ。此間ニ浦潮軍港司令官（コルチャイ）ト海軍兵學校同期卒業者ト聞クハコルチャイノ旨ヲ承ケ本文筆者ヲ來訪シ函行ヲ促スアリ、又當時浦潮ニ駐在中ノ露國陸軍ノ重鎮ホルウト將軍ガ彼ヨリ來訪セルアリ、兎ニ角今ハ時メクコルチャイト舊交アル自分ガ職ヲ帯ビシムス市ニ行クト云フ事ガ露人ノ注意ヲ惹イタラシク感ジタ。其ヨリ二月早々浦潮ヲ出發（此行居住ノ安全ヲ氣遣ヒ故ラニ日記ヲ記サズ日附ケヲ精確ニ記憶セザルヲ遺憾トス）シ同月上旬ジムス市驛ニ着イタ。ジムス市着ノ際ハ以外ニモ儀仗兵立テ附ケノ儀禮ト政府關係文武高官ノ出迎ヘラ受ケタ事デアツタ。後ニ聞ク所ニヨルト、此ハコルチャイト高等統治官ガ前線ニ出發スル前日自ラ書キ殘シタ命令ナリシト云フ。カクテ即日特務機關長武藤信義將軍ヨリ引キ繼ギラ受ケテト代ツタ。

次デ約一週間ノ後コルチャイト高等統治官ガ前線ヨリ歸還シタト聞キ、彼ノ都合ヲ聞キ合ハセ官邸ニ正式訪問着任ノ挨拶ヲ述べタ。此ガ本文筆者トコルチャイトノ第三回ノ會合デアアル。當時會見ノ印象ハ、今ハ全露假政府ノ首腦者タル位置ニ據リ、其上就任以來ジムス市軍ノ士氣大ニ振ヒ、ボロシエウキ等前線ヲ壓迫シツツアツタ際トテ、得意滿面ト見ラルル中ニモ彼持テ前ノ恫懾ニシテ禮儀正シキ態度ヲ保ブレタ事デアアル。尙彼ハ英國ヨリ物質的援助モ藉リツツアル如ク、舊知ノ本文筆者ヲ介シテ帝國ヨリモ同様援助ヲ得トスル希望ヲ懷イタモノト想像サレタ。此以後ハ荷モ高等統治官トシテ事務上ノ交渉ヲ行フ譯ニ行カズ、隨テ彼トノ會見ハ、本文筆者ノ見ムス市滞在五ケ月中僅ニ三回位デアツタト記憶ス。尤モ此中ニ彼ヨリ會見ヲ求メラレタ事モアツタ。

特務機關長トシテ本文筆者ガ行ツタ交渉ノ重ナルモノハ、コルチャイトノ哥薩克頭領（アタマン）セズコトノツノ問題デアツタ。セズコト

ノフノ有スル勢力ハ特ニ顯著ナルモノニアラズ、又彼ノ人物性行ニ就テハ内外ニ定評ノ存スル所デアルガ、苟モ西伯利亞鐵道幹線ヲ多市ニ歸居シ、ラムス少政府ニ向背ヲ明ニセス、暗ニ楯ヲ突ク事實ハ同政府ニ取リ不快ノ種デアラネバナラヌ。ソコデ同政府ハ密ダヨノフ恭順ノ交渉方ヲ本文筆者ニ持チ出シタモノデアアル。此交渉ヲ受ケタル本文筆者ハ勿論浦潮派遣軍司令部ノ訓令ヲ仰ギ、本人ノ意思ヲ確メルノ手續キラ執ツタ上之ニ應ズル事トシタ。此交渉ニハ外務大臣スーギンヲ相手トシテ行ハレダガ、彼我ノ要求懸隔甚シク、幾回カ會談ヲ重ネタ末遂ニ決裂ノ止ムナキニ到ツタ。決裂ハ本文筆者ノ來邸ヲ求メテ、ヨルヂヤーシ自身デ宣言サレタモノデアアル。此日彼ハ昂奮ノ態度ヲ露骨ニ現ハシ、我要求ノ謂ハレナキヲ難ジ、果テハ平素ニナキ勦撃ヲ爲ス程ノ脱線振リヲ見タ事デアツタ。此場合本文筆者ハ多クヲ語ラズ、彼ノ語リ終ルヲ待チ、「然ルカ」「了承」ノ二句ヲ殘シ急ギ退去シタ事ヲ記憶スル。場面ハ明カニ喧嘩分レデ

アツタ。スツト後レテ、此芝居ハ外務大臣スーギン（猶太族出身其後ボリシエウキキニ降服シ絶東ニ於テ犬馬ノ勞ニ服シツツアルノ情報ヲ讀ンダ）ガ打ツタモノト推察スベキ根據ヲ認メタ。彼スーギンハセダヨノフヲ安僧ニ懷柔シ恭順セシメテ之ヲ己ガ功トセント企テタル處、我ノ態度ガ案外強硬ニテ成功ノ見込ミナキヲ察シ、ソコデヨルヂヤークニ勸告シ一ツ洞喝ヲ以テ我ノ讓歩ヲ強イントスル筋書ヲ抽イタモノラシイ。ヨルヂヤークガ周囲ノ群少カラ過マラレタ事ハ當時ラムス在任ノ外人間ニ定評ノ存スル所ナリシガ、本件モ亦其一ナリシガ如シ

セダヨノフ問題ノ交渉ハ三月初カラ開始サレ五月末ニ亘ツタ事ト記憶スル。此間ハ正ニラムス少政府全盛ノ期間ニ屬シ、其前線ハ絶エズボリシエウキキ軍ヲ壓迫シ、アハヨクバカマ河ノ流域ヨリ莫斯科府ニ入ラントスル空想ニ、上下擧ツテ耽リツツアツタ時代デアツタカラ、ヨルヂヤークノ鼻息キ頗ル荒ク、眇タルザバイガル哥薩克頭領ノ言フガ儘ニ聽ク如キハ、高等統治官ノ威嚴ト面目ニ係ルト云

フガ彼ノ肚デアツタラシイ。
 本問題ノ交渉決裂ニ終リタルヲ契機ニ、斷然旗ヲ捲イテ歸東スルニ
 若カズト本文筆者ニ忠告セル特務機關ノ僚友モアツタ。併シ自分ハ
 斷然此際歸東スルハ快ハ即快ナルモ、自分ノ歸東ガ現時ノヨルチヤ
 少ノ心理ニ、何ノ痛痒ヲ感ゼシメルモノニアラズト觀テ取ツタト
 滯在五ヶ月間ニ得ルヨルチヤ多ク政府ノ現狀及前途ニ關スル情報ニ與
 味ヲ感ジ、今暫ラク隱忍スベシトノ執着心ヲ生ジ依然駐マル事ニ決
 心シタ。

果セル哉、七月ニ入り或日ノ事、前記スルキンハ突如自分ノ寓居ニ
 來訪シ、如何ニモ己ノ盡力ニヨル結果デアアル如ク吹聴シ、アタマン
 ・セダヨノフヲ我方ノ要求通り陸軍少將ニ進級セン、其報酬ト
 シテ彼獨得ノ主義綱領（反軍ヲシエヴキ等、反社會革命黨）ニ基キ
 其運動ニ努力セシムベキ旨ノヨルチヤ多ク高等統治官ノ決裁ヲ傳フ
 ト告ゲタ。之ニ對シ自分ハ多クヲ語ラス簡單ニ「御盡力ヲ謝ス、ア

タマン・セダヨノフモ満足スルデアラウト答へ會談ヲ終ツタ。
 七月ニ入りヨムス夕軍ノ前線進テ直シハ殆ド不可能ト見ラレ、サテ
 コソ後方安全ノ途ヲ講ジ置クコトガ喫緊ノ急務ナルヲ感ジタ結果ト
 見ルベキデアアル。

スルキンノ此ノ報ニ接シタ後ハ、ヨムス夕政府ノ前途モ略判明セル
 ニ就キ、勿々歸東スル事ニ決シ七月上旬ヨムス夕市ヲ退去シタ。退
 去ニ際シヨルチヤ少クニ昵近セル一海軍將校ハ本文筆者ニ對シ「貴
 官ノヨムス夕滯在中ヨルチヤ少ク長官ノ貴官ニ對スル態度ハ寧ろ冷
 淡デアツタ。併シ別段惡意アツテ然ルニアラズ、世評ノ煩ヲ避ケタ
 ルノミデアアル。貴官トヨルチヤ少ク會見サルルト、スグト翌日英
 佛外交代表者特ニ佛ノヨムト・ブルヂルガヨルチヤ少ク會見ヲ求
 メ如何ナル利權ヲ日本ニ讓與シタカト執拗ニ追究スルヲ例トシタ」
 ト語ツタ。果シテ然ランニハ本文筆者ノヨムス夕市滯在ハ餘程買ヒ
 被ブラレテキタモノト請ヘル。

日露戦争時代「前記」如ク西伯利亞陸岸ニ無事上陸シ其レヨリ露都
 ニ向ケ歸還ノ途中ヨルシヤ一ツハ或村落ニ來リ偶々日露開戦ノ報ヲ
 聞イタ。依ツテ直チニ海軍省ニ現地ヨリ旅順ニ向ハンコトヲ電請シ
 許サレテ此途ニ急イダ。旅順ニ入ツテ以來ノヨルシヤ一ツ海軍大尉
 ハ驅逐艦長ヲ授ケラレ、直チニ特色ヲ發揮シ、裝甲巡洋艦バヤーン
 巡洋艦ノ一ツキツト等ト相伍シ、我封鎖艦隊ニ對シ剛膽ヲ挑戦行動
 ニ出タ事ハ當時ノ我海軍軍人ノ知悉セル史實デアアル。時ニハ夜陰ニ
 乗ジ機雷ノ沈置ニ出動シ、此中ノ一回ハ我巡洋艦一隻ヲ燬雷沈没セ
 シメタト傳ハツテキル。(本文筆者白ク明治三十七年五月十四日大
 隊口ニ於テ沈没セル通報艦官古ナラン)。此功ニヨリヨルシヤ一ツ
 大尉ハ「剛勇ニ對シテ」 sa xpaδoρeσs 「ト刻セル神聖ヅル字」
 ノ名譽佩劍ヲ皇帝ヨリ賜ハツタ。其後前記二回ノ北氷洋探險ニ引キ
 續キ旅順沖海戦ニ奮闘セル故カ、甚シク健康ヲ害シ旅順開城ノ際ハ
 病院治療中ナリシガ、宣誓シテ歸國セントセス飽ク迄僚友、兵ト進

6 12.2.1.0-1

581

退ヲ俱ニセントノ考ヘヨリ俘虜トシテ我國ニ收容サルル事トナツタ。
 俘虜將校ハ佩劍ヲ許サレザル規定ニアアルガ、皇軍ノ情アル處置ニヨ
 リ正規ノ手續キラ履ミ彼ノ佩劍ヲ許サルル事トナツタ。彼ハ皇軍ノ
 處置ニ對シ衷心之ヲ德トセルモノト見ラル。俘虜トシテ姫路收容所
 ニ收容サレ此間ニ日本武士道ヲ研究シタトハ彼ガ本文筆者ニ語ツタ
 トコロデアアル。爰デモ彼ノ健康回復ハ妙々シクナカツタト見エテ、
 遂ニ宣誓シ許サレテ歸國シタ。

海軍省勳務時代「日露海軍和直後」頃ヨリ露國海軍ノ亡滅ハ、青年海
 軍將校ノ間ニ深甚ナ國民的屈辱ヲ感ゼシメタ。ソコデ海軍復興ト海
 軍ノ缺陷矯正ノ聲トノ運動ハ翕然トシテ此等將校間ニ起リ青年ヨル
 シヤ一ツ中佐(帝政露國海軍ニ少佐ノ官階ナシ)ハ實ニ其首動者ト
 ナツタ。此等一派ノ指摘スル處ハ、戦前ノ露國海軍ニハ豫メ準備サ
 レタル作戰計畫ナルモノ存在セス、又海軍ノ發達及人員ノ訓練ニ就
 テモ明確ナ理念ナカリシ事實ガ敗戦ノ主ナル原因ナリトスルニアツ

6 12.2.1.0-1

582



タ。更ニ造船技術官ト兵科將校トノ間ニ連絡ヲ缺キ、未來ノ海軍ニ
 對スル豫想ハ全然閉却サレタ、第一、海軍省內ニ作戦計畫ニ當ル局
 際トテハ一モ存在シナカツタデハナイカト、一派ハ指摘シテ居ル。
 ソコデ此等一派ハ軍令部ノ創設ヲ主張シ上奏シテ一九〇六年春勅裁
 ラ仰ギ之ガ調査ヲ進ムル事トナリヨルヤ、中佐モ亦委員ニ加ハ
 ツタ。實際軍令部ハ此動機ニヨリ歐洲大戦勃發前ニ成立シタ。
 前記一九〇六年ハ露國議會ノ初メテ開議サルル年デアツタ。ソコデ
 ヨルヤ、中佐ハ此機ニ乘ジ海上勢力復興計畫ヲ議會ノ議員ヲ
 選シ間接ニ民衆ニ宣傳スル目的デ、露都ニ於ケル各種ノ集會ニ臨ミ
 或ハ講演ヲ行ヒ或ハ議員、政黨領袖ト會談ヲ遂ゲ恂々トシテ造艦計
 畫ノ必要ヲ説イタ。彼ノ真率ナ態度ト理路明快ナ立論トハ聽者ニ多
 大ノ感動ヲ與ヘ下院議員等ハ今日迄ノ懷疑的態度ヲ全然改メタト傳
 ハツテキル。

斯ル同ノ重要ナ陸上勤務ニ服シナガラモ、ヨルヤ、中佐ノ海上勤務
 ニ轉出セントスル物々タル雄心ヲ抑フルコト能ハナカツタ。彼ハ四
 ジエストウエンス、司令長官ノ第二太平洋艦隊ガ國際關係複雜ナ
 ル中立國港灣ニ寄港スルノ止ムヲ得ザルヨリ遊延時機ヲ失シ個々ニ
 擊破サレタル失敗ニ鑑ミル所アルト、又露國民ガ北氷洋ヲ以テ不可
 入ノ魔境ト自ラ諦メ現代科學ノ進歩ニヨリ自然ニ打勝ツベキ途アル
 ニ拘ラズ之ガ研究ヲ閉却シ居ルニ憤慨シ、三たび北氷洋探險ノ急務
 ヲ主張シ上申スル所カアツタ。此上申ニ對シテハ如何ニモ正當理由
 ノ存スルモノト認メラレ直ニ採用サレタ。ソコテ彼自身特別探險船
 隊（二隻）ヲ設計シ其竣工ヲ待ツテ一九〇九年秋自ラ此等二隻ヲ率
 イタ回シタツト軍港ヲ出デスエズ運河ヲ通過シ浦潮ニ到着シタ。
 今次ノ探險ハ東ヨリ西ニ北氷洋ヲ横断スルニアツタ。然ルニ彼ガ浦
 潮ニ入港スルト、彼ハ海軍大臣グリゴロウウヰツチヨリ「北氷洋探
 險ハ之ヲ他ノ將校ニ委ネ、貴官ハ至急歸京スベシ」トノ命令ニ接シ

シテアツタカラ直チニ之ヲ實行ニ移ス迄デ、日露戦争當時ニ於ケル如キ周章狼狽、無爲無策トハ比シナラヌ程ノ沈着ト艦隊ノ士氣旺盛ガ認メラレタ。是全ク日露戦争教訓ノ賜ト觀ネバナラヌ。ソコデエッセン大將ノバルジツク艦隊ハ直チニ作戰計畫ヲ實行シ露領バルジツク海岸一帯ニ機械水雷ヲ敏設シ舊式巡洋艦及驅逐艦ヲ各其配備ニ就カシメ決手敵來襲ヲ待ツバカリトナツタ。然ルニエッセン大將ハ守勢ノミニ出ツルヲ欲セス進んで攻撃的ニ出デ敵軍港附近ヲ攻撃スルノ作戰ヲコルチャークニ架出セシメタ。此結果キール軍港及グンチツヒ港ニ對スル驅逐艦ノ夜襲及機雷沈置ノ壯舉ガ一九一四年ノ秋ヨリ一九一五年ノ冬ニ掛ケ度々決行サレタ。コルチャークハ作戰ヲ計畫スル者ハ必ズ遂行者ト同一場所ニアラサレバ責任ヲ無視スル者ナリトノ固キ信念ヲ懷キ此等累次ノ壯舉ニハ毎時參加シ時ニハ自ラ驅逐艦ヲ指揮スル事モアツタ。

タ。蓋シ此頃ニ到リ獨逸トノ戦争ガ豫想サレ海軍大臣ガコルチャークノ本省勤務ヲ必要ト認メタカラデアアル。北太平洋深險ハコルチャークヲ兼ニ基キ他ノ將校ニヨリ見事奏功セラレタ。第二回海軍省勤務時代一役ガ浦潮ヨリ召遠セラレ再ビ本省勤務トナルヤ、舊職ニ復シ海軍復興計畫ヲ擔當スル事トナツテ、澤山ノ彼ノ拔ツタ仕事ノ中二十ヶ年造船業ト稱スルモノアリ遂ニ兩院ヲ通過セシメタ。此ヲ契機ニ彼ハ又、バルジツク艦隊司令長官海軍大將エッセンノ春傑、作戰部長ニ榮轉シタ。エッセン大將ト云ヘバ日露戦争ニ馳名ヲ録カシタル果敢ノ勇將デアアル事ハ苟モ當時ノ旅順封鎖戰ニ從軍セル我海軍將士ノ知悉スル程ノ人物デアアル。コルチャークハ當時、露日戦争後ノ殘存舊式艦及驅逐艦ヲ按排シ對獨作戰計畫ヲ立テ長官ノ承認ヲ得テ益之ガ信頼ヲ博スル迄トナツタ。歐洲大戦中バルジツク艦隊時代一急ニ對獨宣戰トナツタガ、今度コノ露國海軍ニハ軍令部ガ創設サレ、隨テ作戰計畫モ出師準備モ完成



獨逸巡洋艦、驅逐艦、瑞典ヨリ鐵嶺ヲ滿載シ歸國スル汽船ガ此等
 雷ニ觸レテ沈没スルモノ頻々トシテ相次ギ、爲ニ獨逸バルチック
 海艦隊司令官ハ、露國機雷ノ處分ヲ終ル迄ハ部下艦艇ニバルチ
 海ニ入ルベカラズト訓令スルノ止ムナキニ到ツタ。最後ニ一九一
 五年ノ夏獨逸陸軍ガリイカ市ヲ攻撃セントスルニ當リ之ガ海上掩
 護ニ同艦隊ノ本隊ヲ同港ニ入港シタル事ガアル。コルチャイ
 大佐ハ舊戰艦 スライヴヤト驅逐艦ヲ率ヒ之ニ當ツタ。獨逸艦隊ハ
 優勢ヲ以テリイカ港内ノ機雷ヲ掃除シ幸ニ海内ニ入りタルモノ
 ノ精銳ノ大部分ヲ亡ヒ、加フルニコルチャイ戰隊ガ灣口ニ艦
 視スルニ於テハ灣内ニ滯泊スル危險ヲ感シ蒼皇艦ヲ抜イテ歸還シ各
 カクテリイカ市ノ占領ハ免レタ。此時ヨリコルチャイ大
 佐ハバルチック艦隊所屬ノ全驅逐艦ヲ指揮シ兼テリイカ灣
 防備隊司令官ニ任セラレタ。彼ハリイカ市防禦ノ功ヲ認めラレ
 テ神聖ザオルギ勳章ヲ賜ハリ一九一六年四月海軍少將ニ進メ

彼天稟ノ海軍將帥タル特性、即、奏功ノ機會ヲ巧ミニ捉ム事、情況
 判斷ヲ誤ラザル事、責任ヲ回避セザル事等、此等壯舉ヲ通シテ屢發
 露サレタ。其主ナルモノヲ舉グレバ、一九一五年一月一日ノ夜陰ニ
 乘シ舊式巡洋艦ロシヤ(司令官旗艦)ニ機雷數百ヲ搭載シ、
 軍港ニ向ヒ出發セルカ港口五十哩ノ地點ニ達セル頃敵ノ電波ヲ感ズ
 トテ司令官ハ引キ返ヘサントセルヲ、コルチャイハ情況判斷
 ヲ續々ト説明シ計畫遂行ヲ懇請シ司令官モ遂ニ之ニ從ヒ首尾克ク豫
 定通り任務ヲ遂行シ、巡洋艦 ロシヤモ敵ニ發見サレズ無事歸還
 セシコトガアル。又一九一五年二月コルチャイ大佐ハ驅逐艦
 四隻ヲ自ら指揮シダンチック港口ニ向ヒ機雷沈置ノ目的ニ出動
 シタ。當時ノ狀況デハ随分ノ冒險ト認メラレ之ガ掩護ニ巡洋艦ヲ附
 ヒラレタ。然ルニ同巡洋艦ハゴットランド島附近ニ座礁ヒシカ
 バ、コルチャイハ無電ニテ直接司令官ニ要請シ巡洋艦ノ掩護
 ナシニ任務遂行ヲ願ヒ出デ聽サレテ幸ニ任務ヲ果スマ得タ。此結果、

九一六年春期ダケテ三十隻ノ多敷ニ上リ、黒海ノ制海權ハ全然獨逸艦隊ニ歸スルノ悲境ニアツタ。斯クテハナラジト、コルチヤーク長官ハ、ボスフォラス入口及勃牙利、ワルナ港ニ濠封鎖ヲ取行スル事ニ決心シ準備ノ成ルヲ俟ツテ驅逐艦ト特別裝置ノ機雷沈敏船トニヨリ夜陰ニ乘シ決行シ約二、〇〇〇ノ機雷ガ敷カレタ譯デアツタ。此亦、コルチヤークカ旅順封鎖戦ニ倣ケル体験ノ賜ト云フ可キデアラウ。此戦策ハ豫想以上ノ効ヲ奏シ獨逸ハ潜水艦六隻ヲ亡ヒ、一九一六年十一月半ヨリ、コルチヤークカ長官ヲ能メル迄ノ間ニ敵ノ軍艦、潜水艦、運送船ノ、ボスフォラスヲ出デテ黒海ニ侵入スルモノ絶無トナリ、之ニ反シ土耳其ハ石炭輸入ノ途（黒海南岸ノ土耳其領）ヲ絶タレ、君府ハ發電不可能トナリ暗黒街ト化シタト云フ。此ニテ黒海ノ制海權ハ全ク露國ニ歸シ陸軍部隊ノ補給ハ復舊シタト傳ツテ居ル。

ラレタ。歐洲大戦中、黒海艦隊時代、此時代ガ、コルチヤークノ海軍指揮官トシテノ最モ著シイ偉勳ヲ立テタ時代デアツタ。四月ニ海軍少將ニ進級シ將官名簿中ノ最若年者デアツタ彼ハ二月ノ後六月海軍中將ニ進メラレ同時ニ黒海艦隊司令官兼、セヴァストポリ、鎮守府長官ニ補セラレタ。眞ニ異數ノ拔擢ト云ハネバナラス。蓋シ當時黒海ニ於ケル戦況ハ斯ル偉材ヲ要求シタモノデアツタ。此頃、露ノ高加索軍ハ土耳其軍ヲ驅逐シテ、エルズルム及、トレビゾンドヲ占領セルガ、軍需品及糧食補給ヲ、ノウヂロツシースク港及、バツィム港ヨリ又南西車モ、ブゾフ海及、ラヂツク港ヨリ夫々海上輸送ニ付ダザルベカラサル現狀ニアツタ。然ルニ黒海艦隊ノ勢力ハ、獨逸ノ軍艦、ゲーベン、ブレスロウニ劣ルニアラザリシモ速度ノ劣レルタメ、之ヲ追及スル能ハズ彼等ノ跳梁ニ任セ露運送船ノ擊沈サルルモノ夥シク、又獨逸潜水艦ノ襲撃難ニ罹ルモノモ一

紀律ヲ維持シ得テ此間屢出動ヲ試ミ内外ノ時後ニ貢獻シタノデアツ
 タ。然ルニ大勢ノ歸傾スル所如何トモシ難ク、革命徒一味ノ諍ケタ
 勞兵會議ナルモノノタメ、サシモ堅城の壁ト稱マレタ黒海海軍ノ紀
 律モ次第ニ切リ崩サレテ遂ニ之ガ收拾全ク不可能ニ歸シタ。前顯恩
 賜ノ佩刀ヲ海ニ投ジタト云フハハ此時ノコトデアル。コルヂヤイ
 ハ日々ニ事ノ非ナルヲ悟リ、自カラ假政府當局者ニ真相ヲ報告シテ
 反省ヲ促スニアラザレバ露西亞ノ亡滅ヲ免レスト觀テ取り一意露都
 ニ向ヒ出發シタ。此途中ニ於テコルヂヤイタガ激怒措ク能ハザリシ
 ハ、獨逸ガレニシ一派ヲ瑞西ヨリ密封貨車ニ乘セ露國內ニ解放セ
 ル事實ヲ聞イタ時デアル。彼ハ獨逸作戰ノ卑劣ヲ極度ニ憤慨シ此時
 ヨリ、彼ハ獨逸ト對リシニウキキヲ不俱戴天ノ仇ト認メ一兵率トナ
 ツテ迄モ聯合國側ニ加ハリ此等ト闘ハサルベカラスト深ク決心シタ
 彼方露都ニ着クト假政府ヨリ召サレ意見ヲ徵セラレタ。之ニ對シ彼
 ハ軍隊紀律廢頽ノ恐レルベキヲ稟説シ、之ガ爲、陸海軍ニ死刑ヲ再

革命時代一 一九一七年三月革命ノ報傳ハリシ頃コルヂヤイ少長官ハ
 海上ニ出動中デアツタ。モウアト一宗リ軍港ニ於テハ、各部靜謐デ
 軍紀モ尙未ダ廢頽シテ居ナカッタ。間モ無クニコルヂヤイ二世ノ退位ノ
 報ト同様ヨリ陸海軍軍人ニ賜ハリタル告別ノ詔勅一假政府ヲ支援シ
 最後迄戰爭ヲ繼續スベシ一ガ傳ハツタ。元來陸海軍軍人ハ皇帝ニ忠
 誠ヲ盡スベク傳統的ニ教育サレタ者デアル。然ルニ事爰ニ到ツテハ
 舊制度ニ忠誠ヲ守ルト、國民死活ヲ以テ戰ヒツアル露西亞ノ利益
 ノ間ニ撰ムベキ途ハ唯一ツトテ、コルヂヤイタハ時ヲ遷サス假政府
 ニ自ラ忠誠ヲ表明シ又部下ノ艦隊乗員、守府員、工廠員、及要塞
 諸兵ニ對シ訓示ヲ發シ假政府ヲ支援シ、成功ヲ以テ戰爭ヲ終ルベク
 各員一層奮勵努力スベシト告ゲタ。此時鎮守府將兵、職工及艦隊ノ
 乗員ニモ少シモ動搖ノ色ナクコルヂヤイタ中將ニ至大ノ歸服ト信賴
 ヲ措キ、彼等ハ一意服從スベキ旨ヲ誓ツタ。此ノ如クニシテ黒海海
 軍ハ波羅的海軍ガ早ク既ニ廢頽セルニヨリ三ヶ月ノ後ニ亘リ克ク其



外國旅行時代、彼が露都ニ入ツタ時、恰モ米國ノエリフ・ルート使節ナルモノ來着シテラツテ、此中一人ノ海軍將官ハコルチャークヲ米國ニ招請シタ。其目的ハ米國海軍ニダータネルス海峽占領作戰ノ計畫アリ、コルチャークガボスフォラス海峽閉塞ニ至大ノ經驗ヲ有スルヲ以テ、其知識ヲ籍ラントスルニアツタト傳ハツテキル。彼ハ本國前線ニ於テ此以上盡スベキ途ナキヲ覺リ、意動キ、米國ノ招請ニ應ズル事ニ決心シ其準備ヲ進メツツアツタ。然ルニ一方ニ國民主義者ノ間ニ前記ノ如キコルチャークノ聲望ヲ慕ヒ未來ノ執政官ニ擬シ、推戴シテポリシエウキキ討伐、假政府左翼閣僚ノ排斥ヲ目的トスル秘密愛國團體現ハレ彼ニ交渉スル所アツタ。彼ハ之ヲ應諾シ、米國渡航ヲ辭シ露本國ニ殘留セント決心シタ。處ガ、事志ト違ヒ、秘密愛國團體ノ運動ハ忽チニケレンスキ軍務大臣ノ知ル所トナリ、同官ヨリ早速米國ニ出發スベシトノ命令ニ接シタ。事爰ニ到ツテハ如何トモスル能ハズ彼ハ腹心ノ幕僚ヲ從ヘ一九一七年八月十九日露

興スベキコトト、露國軍隊ノ内狀ヲ聯合側ニ率直ニ披瀝シ、此上ハ露國援助ノ頼マレザルコトヲ通告スベシトセリ。假政府ハ之ガ研究ヲ約セルモ何等ノ結果ヲ見ル能ハズシテ止ム。コルチャーク中將現役ノ終一以上彼ベタ處デ彼ハ日露戰爭及歐洲大戦ヲ遡ジ、如何ニ蘇々タル戰功ヲ立テタカガ了解サルル事ト信ズ。其外海軍省勤務時代ニ於テ制度ヲ改正シ、海軍復興ノ基礎ヲ定メタル海軍行政ノ手腕技術ニ於テモ偉績ヲ現ハシタ事モ亦了解セラレル事ト信ズ。此等ノ偉勳偉績ハ帝政時代ノ高官モ在野ノ政客モ等シク具ニ瞻ル所デアリ、又彼ノ滅私報國ノ燃ユル如キ情念ノ發露モ汎ク認メラレタ所デアツタ。想フニ是迄ガ彼ノ最モ得意時代デアツタト謂フ可キデアラウ。此ダゲノ聲望ヲ自ラ博シ得タルコルチャークトシテハ困難ノ續ク限り何時カハヨリ以上ニ極要ノ位置ニ擔ギ揚ゲラルベキ機會ノ到來豫期サルベキハ當然豫期サルベキデアル。茲ニコルチャークノ運命ノ分カルル時ガ來タ。

都ヲ出發シタ。恐ラク氣ノ進マヌ首途デアツタデアラウ。
 途次倫敦ニ立寄り英國海軍省ノ優遇ヲ受ケ、サテ華盛頓ニ到着シテ
 見ルト、エリフ・ルート使節ノ計畫ト稱セララルルターダネルス海峡
 作戦ナド夙ニ沙汰止ミトナリ何ノ爲渡米セルヤワカラヌ仕儀トナツ
 タ。本文筆者ト鐵道ホテルニ會見ノ際、米國ヘハ何ノ目的ニ出向サ
 レシヤトノ筆者ノ問ニ對シ、彼ハ言葉ヲ濁シテ眞實ヲ語ラザリシガ
 筆者ハ彼ガ旅順封鎖戰ニ於テ經驗セル機雷沈置ヲ米國海軍ニ傳授セ
 ルモノト推察シ深クハ聞キ質サナカッタ。ソコデ彼ハ日本經由露本
 國歸還ノ途ニ上リ、桑港ヲ出發スル前日ボリシエウキヤ十月革命ノ
 報ヲ聞キ痛ク憤慨シタ、ト傳ハツテキル。
 一九一七年十一月東京着、十月革命ノ詳報ト、ボリシエウキヤ及獨
 逸間ニ單獨媾和ノ企アルノ報ニ接シ彼ハ極度ニ憤慨シ飽迄聯合國側
 ニ忠實ナラントシ又露國民トシテ義務ヲ果サントノ堅キ觀念ヨリ在
 東京英國大使館ニ就キ交渉シ英國軍ニ從軍ヲ申シ出テタ。英國大使

596

ハ此要請ヲ容レ、一先ツ在ボムベール印度軍司令部ニ行キ其ヨリメソ
 ボ多ミア前線ニ進マレタシト答ヘタ。然ルニボムベール行キノ途中、
 新嘉坡マデ來ルト、英國政府ノ名ニ於テメソボタミア軍ノ出動ハ狀
 況變化ニヨリ之ヲ撤回スルノ止ム無キニ到ツタ旨ノ公報ニ接シ、爰
 ニモ亦彼ノ壯圖ハ實現シナカッタ。其後彼ハ新嘉坡ヨリ引キ歸シ、
 在北京露國公使タダシエフノ招電ニヨリ北京ニ入ツタ。
 コルチャイタガラムスクニ現ハレ、一九一八年十一月十八日ノ政變
 ニ高等統治官ニ推サルル迄北京滞在ノ期間ト此間彼ガ如何ナル行動
 ヲ爲シツツアツタカハ詳テナイ。併シ此間ニ歐露ニ發生セル事態ハ
 彼ニ取り喜バシキ轉向ヲ示シタ。アレキセイエフ、コルニール、
 將軍ノ白系露軍ハ南露地方ヨリボリシエウキヤ軍ヲ驅逐シ、西伯利
 亞ハチエツコ・スロワツク軍ノ援助ニヨリボリシエウキヤ軍ヨリ解
 放サレ、サマラ市ニ於テハ反ボリシエウキヤ政府ガ起リ次デウフア
 ！ニ於テ此等反ボリシエウキヤ國ノ統一會議ガ催フサレ、五人頭領

596

5 12.2.1.0-1



ノ執政官制度が成立スル等ノコトアリ。コルチャイフニ昵近ナル一
 海軍將校ノ傳フル所ニヨレバ、コルチャイフハ西伯利亞及ウラリス
 タヲ經テウリミア(爰ニ彼ノ妻子ガ居住シタ)ニ出テ舊恩顧ノ郎黨
 タル黒海艦隊ニ歸リ砲ヲ迄ボリシエウキキト闘ハント決心シ絶東ヲ
 出發シタト言ハレテキル。後日、此ガコルチャイフ自身ニ取ツテハ
 明哲保身ノ術デアツタ事ガ判明シタ。併シ明哲保身ノ術ハコルチャ
 イフハ潔シトセヌ男デアツタ。

ラムスタ時代ノ右旅行ノ途次ラムスタ市ニ達セルトキ前記五頭執政
 官ハコルチャイフニ對シ陸海軍大臣ノ職ヲ提供シタ。時恰モ執政官ハ
 彼ノ如キ盡忠報國ノ念ニ篤ク私心ナキ知名ノ士ヲ迎ヘント仰望シツ
 ツアツタ際デアアル。彼ハ之ヲ應諾シラムスタ市ニ留マル事ニ決シ
 タ。時ハ一九一八年九月末ノ事デアリ、ラムスタ市ハ西伯利亞哥薩
 克兵團本部ト西伯利亞政府ノ所在地デアツタ。然ルニ五頭領ノ執政
 官制度ハ、其人選ト傳統ニ於テ復雜デアリ、兎角五人間ニ圓滿ヲ缺

キツツアリシガ、社會革命黨員ガ重キヲ爲スニ及ビ軍人及コサツク
 代表者ノ間ニ五人執政官制度ヲ廢スル陰謀ガ熟シ、遂ニ十一月十七
 日夜ク、デ・ターガ行ハレ五人中ノ社會革命黨員二名ハ捕縛サレ、
 爰ニ執政官制度ハ終焉ヲ告ゲタ。其翌十八日大臣會議(執政官ノ下
 ニ内閣ヲ組織シコルチャイフハ此中ノ陸海軍大臣ニ列シテキタ)ハ
 時ノ狀況ヲ認メ反ボリシエウキキ軍ノ最後迄指揮シ得ル偉材一人ヲ
 求メ之ニ高等統治官ノ權限ヲ授ケ制度ヲ建テ直ス事ニ決定シタ。
 是ヨリ先キ、コルチャイフハ陸海軍大臣トシテ十一月初メニ前線ヲ
 巡視シ、十七日ラムスタニ歸着セシ事トテ此陰謀ニハ全然參加セザ
 リシ筈。サテ十八日ノ大臣會議ニ於テ果シテ何人ノ偉材ニ高等統治
 官ヲ推スカノ問題トナリ、或ハホルワト將軍ヲ推サントスル向モ
 アリ、コルチャイフ陸海軍大臣自身ハホルツギレフ將軍ヲ推サント
 發言シタリシガ、結局、會議ハコルチャイフノ離席ヲ乞ヒ此間ニ衆
 議ヲ纏メコルチャイフヲ推ス事ニ決シ、之ヲ本人ニ通告シ彼ノ承諾



ヲ得タノデアル。是ハ一九一八年十一月十八日デアツタ。此日ヨル
 ジャーシ最高統治官ハ一般民衆ニ對シ就任ヲ應諾セル挨拶ヲ述ヘ悲
 壯ナ訓示ヲ爲シタ。(訓示略ス)。
 一九一八年十一月十八日最高統治官ニ就任セシヨリ一九一九年五月
 末ニ到ル約半年間ハ、ムジャールノ最モ得意時代デアツタ。
 彼ハ先ツ西伯利亞軍ヲ召集編制シ前線ヲ巡視シ前線ノ士氣ヲ鼓舞振
 作シ、ボリシエウキ軍ヲ壓迫シテ内外ノ信賴ヲ博シ、今ニモ莫府
 ニ逼ラントスルノ氣勢ヲ示シタ。然ルニ前記社會革命黨ハ飽ク迄革
 命前ノ企ニ執着シ凡有ル手段ヲ以テ執政官制度ヲ覆サント努メ全西
 伯利亞地域ニ亘リ後方攪亂ノ宣傳ヲ企テタモノデアアル。斯クナツテ
 ハ、西伯利亞地方ニ於テ募兵ハ困難トナリ、又交通ノ不備ト緩弛ハ
 前線ヘノ補給ヲ不可能トナラシメ、加フルニ此頃ハ既ニ對獨休戰條
 約(一九一八年十一月十一日)ガ締結サレタ後ノ事トテ、聯合國側
 ハ東部戦線ノ必要ヲ痛切ニ感ゼザルニ到リ、曩ニ西伯利亞軍ニ援助

S 12.2.1.0-1

599

セルチエツコスロウツク兵ノ如キ全ク戰意無キノミカ、却テラムス
 夕政府軍ニ對シ敵意ヲ持スルニ到ツタ。又聯合國側ノ外交代表者モ
 陸軍特務機關モ協同ノ目的ニシムス夕政府ヲ支援セントハセズ。斯
 ル間ニボリシエウキ軍ハ其陣容ヲ整ヘ益々壓迫ヲ加ヘ來ツタカラ
 ラムス夕政府軍ハ退却ニ退却ヲ加ヘ、既ニ七月ニ入りテハ前線ノ回
 復覺束ナク、ラムス夕市ノ運命モ全ク時ノ問題トナツテ終ニ一九一
 九年十月末ヨルジャールハ文武幕僚ト殘兵ヲ率ヒ東ニ向ヒラムス夕
 市ヲ撤退スルノ止ムナキニ到ツタ。斯クテ西伯利亞ニ於ケル反露リ
 シエウキ軍運動ハ挫折ヲ告ゲタ。
 前記ノ如クヨルジャール及文武幕僚ト殘兵ヲ乘セタ列車ハ十月末ニ
 ラムス夕市ヲ、佛ヂヤナン將軍ノ率ユルチエツコスロウツク軍ヲ乘
 セタル列車ハ約一週ヲ後レ一九一九年十一月七日ニ夫々ラムス夕市
 ヲ出發シタ。

S 12.2.1.0-1

600



カクテ兩者ガ前後シテチルターツク市ニ近クト、同市ハ既ニダニシ
 エウキギト社會革命黨ノ聯立政府デアッタガ、急變シテ真正銘ノ
 派リシエウキギ革命委員ヲ手ニ政權ガ歸着シタ。此以前未ダダニシ
 エウキギ及社革黨聯立政府ノ名義タリシ時、同政府ハチエツコム
 ワツク軍ノ指揮セル佛將ヂヤアンニ使ヲ送り、コムヂヤークヲ本政
 府ニ渡スニアラザレハチエツコムワツク軍ノ通過ヲ許サズト交渉
 スル所アツタ。之ニ對シ佛將ヂヤアンハチエツコムワツク軍ヲ抑
 制スルコト出來ズ同政府ノ要求ニ從ヒコムヂヤークヲ引キ渡シタト
 云ハレテキル。ヂヤアンハ又辯解シテコムヂヤーク自ラ進ンデ死地
 ニ飛ビ込ンダ者ダト云ツテキル。一説ニハ又コムヂヤークノ最モ信賴
 スルワツク軍ノ將軍ハ其主ノ一命ヲ救フ爲一戰ヲ辭セズトノ最終通牒
 ヲ同政府ニ送ツタガ、コムヂヤークハ之ヲ知り最終通牒ガ却ツテ反
 對ノ結果、即チコムヂヤークノ身邊ニ不利ナ形勢ヲ來サント考ヘタ
 ト云ハレテキル。兎ニ角道般ノ真相ハ二十年ヲ經タル今日ニ於テ尙

未ダ判明セヌ。本稿筆者ガオムス少滞在中ヂヤアンニ就イテ知ル限
 リ、彼ハチエツコムワツク軍ヲ抑壓スル能ハズシテコムヂヤーク
 ライルクワツク政府ニ交附シ兼ハネ間敷人物デアル。恐フクヂヤア
 ンハイルクワツクノ政府ノ提議ヲ受ケ承諾ノ回答ヲ發シタト見ルガ
 正當デアラウ。併シコムヂヤークハ此時未ダ不能者ニ陥ツテキナイ。
 意志ノ自由ヲ有シ、加フルニ己ニ忠實ナ部下ヲ率キテイル。サレバ
 假令ヂヤアンガ引キ渡サウトシタ處デ、コムヂヤーク本人ガ頑張ル
 ニ於テハ如何トモスル能ハザル事トナル。ソコデコムヂヤークハイ
 ルクワツク政府ノ内情判斷ヲ誤リ、眞率ニ義理ヲ説クニ於テ彼等ヲ
 説得スルニ何ノ俾ル所アランド深ク自ラ決シ、進ンデ死地ニ陥ツタ
 ト解釋サレヌデモナイ。



編者附記

故田中中將ハ我ガ海軍有數ノ露國通デ、其調査、研究心ノ旺盛ナリシコトニ關シ故加藤寬治大將ガ常ニ推賞措カザリシコトハ編者親敷屢々之レヲ耳ニシタ所デアアル。西伯利亞出兵當時ニ於ケルオムスク出張ハ同中將現役中ノ掉尾ノ御奉公デアツタ。露國ニ關スル豊富ナル學識ト多年ノ經驗及ビコルチャークノ海軍大將トノ個人的關係等ヨリシテ、其ノ成果ニ多大ノ望ヲ囑サレタガ、コルチャークガ中途ニシテ失脚シタルヨリ、田中中將ノ事績ハ世人ノ知ル所トナラズシテ埋レタ。コルチャークノ失脚ハ革命蘇聯政權ノ發展ニ至大ノ關係ヲ有シ、殊ニ當時中央亞細亞ノ向背ハコルチャークノ西伯利亞ニ於ケル地盤強弱ノ因ヲ爲スナド、西伯利亞ニ於ケルコルチャーク政權ノ興敗ニ關スル記述ハ興味深キモノアリト思考シ、昭和十四年初夏ノ候、田中中將病後ノ衰弱未タ全愈セザル際其執筆ヲ請ヒ之レガ快諾ヲ得タリ。然ルニ筆漸ク進ミテ事件ノ佳境ニ入ラムトスル時俄カニ

モ亦率直、明確ニ答ヘ、特ニ自己ノ經歷、所信ヲ陳ブルニ當ツテハ盡忠報國ノ觀念以外何等黨派心ノ偏癖ナキ事ヲ言外ニ理解セシメタト傳ハツテキル。此ノ如クシテ初メノ程ハコルチャークノ處刑ナドハ想像モ附カヌ程ナリシモ、後ニボリシエウキキノボボガ査問委員ニ加ハルニ及ビ著シキ敵意ヲ表セル強烈ナ主張ヲ爲スニ到リ、加フルニ前記カツペル將軍ノ最後通牒ガ禍シ遂ニ一九二〇年二月九日死刑ヲ宣セフレタ。銃殺ハ即刻執行サレタガ彼ハ神色自若、從容トシテ歸スルガ如ク死ニ就イタト傳ハツテ居ル。享年四十七歳。尙新聞記者談トシテ傳ハル所ニヨルト、數名ノ銃手ハ故ヲニ狙ヒヲ外ヅシテ殺サウトハセズ、此等ハコルチャークノ舊部下タリシ事ガ判明シ、斯クテハ果テジト執行官自ラ銃ヲ執リ頭蓋ヲ射貫イタト云フ。

病革マリテ筆ヲ投ジ、病床ニ就カレテヨリ九日藥石効ナク終ニ永眠
 セラレタリ。豫定セラレタル目次コルチャーク政府ノ興亡、コルチ
 ヤークノ作戦（陸上ノ海軍戰略）、結語、挿話（大阪道修町ノ藥種
 商ガキルギースニ於テサントニ原料入手ノ許可ヲ得タル件其他）
 等興味深ク且ツ貴重ナル事項ヲ殘シテ筆ヲ措カレタルハ遺憾千萬ナ
 レドモ、コルチャーク大將トノ個人的關係、コルチャークノ小傳、
 等後世史家ノ爲得難キ資料ヲ書遺サレタルニ依リ、之ヲ輯録シテ參
 考ニ供スルコトトセリ。卷頭ノ目次ハ故田中中將ノ遺稿其儘ヲ掲載
 セルモノニシテ、内容ノ記事ト一致セサルモノアルハ前掲ノ事情ニ
 由ルコトヲ諒トセラレタシ。

高齢ノ故中將ガ病後衰弱ノ身ニ在リナガラ勇ヲ鼓シテ後世ノ爲メニ
 孜々毎日ペンヲ呵シテ倦マレザリシ勞ヲ多謝スルト同時ニ茲ニ重ネ
 テ其生前ノ活動ニ對シテ敬意ヲ表ス

昭和十五年三月誌

S 12.2.1.0-1

605